

アウグスティヌスの『創世記』解釈と詩編の引用

—『告白』第二二巻に即して—

田内千里

序

アウグスティヌスは『創世記』解釈を五つの著作において行った。⁽¹⁾これらのうち『告白』第二二巻は執筆順序としては三番目にあたり、『創世記』冒頭の句の「天地」が解釈の対象とされている。当初、天地は「私が見る天」「私が踏む地」(一一・二二・二二)⁽²⁾として物的被造物を指すとされていたが、「それにしても、主よ、『天の天』はどこにあるのでしょうか (ubi est caelum caeli)」。それについて私たちは、詩編の作者のこういう声を聞きます。『天の

天は主のもの。されど主は人の子らに地を与えた』(詩一一三(一一五)・一六〇)⁽³⁾というアウグスティヌスの唐突な問いと詩編の引用をきっかけに、天は「天の天」と称され、「私たちの見ることでできない天」であり、「はじめから形相づけられたもの (prinitus formatum)」(一一・一三・一六)という存在規定を与えられる。他方、地はそれによってすべての被造物が創造される「無形相的質料 (materia informis)」を表すとされる(一一・三三・三三)。五回の『創世記』解釈に一貫性を見出そうとする試みにおいては、この天の存在規定はさまざま議論を呼び寄せた。『告白』の後に書かれた『創世記逐語註解』には、天と地

を二つの無形相的質料とする解釈の可能性について言及されているからである。⁽⁴⁾ これをして『告白』第二二巻の天の解釈は後に修正されたのだと考える発展史の見方からすれば、『告白』の天の解釈はアウグスティヌスの『創世記』解釈史における一通過点としてみなされよう。だが、本稿では、「天の天」が詩編からの引用であることに注目したい。なぜ、『創世記』を解釈するのに詩編が引用されるのか。それは、この解釈が『告白』の一部分を成していることと関係があると思われる。『告白』全巻を見渡すと、詩編の引用回数は他の聖書からの引用に比べるとはるかに多く、⁽⁵⁾さらには詩編そのものに関する叙述も散見される。アウグスティヌスは詩編を引用するだけではなく、詩編に対し自らが有しているある一定の理解を本書において示しているのである。そうであれば、第二二巻で「天の天」が詩編からの引用であることが明示されたのには、本巻における『創世記』解釈にもその詩編理解が及んでいることを示唆するアウグスティヌスの意図があるのではないかと考えられる。したがって、本稿では、まずアウグスティヌスの基本的な詩編理解とは何かを問う。具体的には、『告白』の自伝的部分の最終巻にあたる第九巻に詳細に描かれてい

る詩編四の読誦経験を考察の対象とし、アウグスティヌスの詩編理解の基本的性格と特質を読み取る。次に、第二二巻における天の解釈について、「天の天」が何を指すのかを考える。ここでは「天の天」のさまざまな言い換えに着目し、先行研究にも触れながら、しばしば「天使」を指すと了解される「天の天」の指し示すものの別の可能性を検討する。⁽⁶⁾ 以上のアウグスティヌスの詩編理解および「天の天」に関する考察を踏まえて、第二二巻の『創世記』解釈で詩編が引用された理由を明らかにする。そして、最後に、そのような天の解釈から浮かび上がる、第二二巻の『創世記』解釈という営み自体が何であるのかについても若干の言及を行う。

1 詩編理解の諸相

第九巻では、回心を経たアウグスティヌスのキリスト教徒としての生が同じ信仰をもつ仲間たちとの共同生活や受洗、教会での出来事などによって具体的に語られている。詩編四の読誦経験はそのようなエピソードの一つである。詩編が一節ごとに引用され、それに対し、アウグスティヌ

スが語るといふ仕方では叙述されている。その中でアウグスティヌスの詩編理解を顕著に示すと思われる箇所を引用し考えてみたい。

(A) 私は恐れおののくとともに、父よ、あなたのおわれみのうちに希望し歓喜して燃えあがりました (Inhorruī timendo hīdenque inferbui sperando et exultando in tua misericordia, pater)。そしてこれらすべては、あなたの善き霊が私たちに向かつて「人の子らよ。いつまで重い心でいるのか。何のためにもなしいこと (vanitas) を好み、虚偽 (mendacium) をもとめるのか」(詩四・三)と言ったとき、私の目と声とを通じ面にあらわれてきました (Et haec omnia exhibant per oculos et uocem meam)。じっさい私は、むなししいことを好み、虚偽をもとめていたのです。(中略) 私は回想の苦しみをなめながら、しばしば重いいはげしい叫び声を発しました。いまもお、むなしさを好み虚偽を追い求めている人々が、その叫び声を聞いてくれたらよかったのに。(中略) それからあなたに叫ぶならば、あなたは願いを聞きとどけてくださるでしょう。(九・四・九)

アウグスティヌスは詩編の言葉のうちに自らの過去の生との対応関係を見出している。この後も詩編の言葉を自分に置き換えて叙述は進められてゆく。さて、本引用において注目すべきは第一文である。詩編四・三を読んで「恐れおののいた」「希望し歓喜して燃えあがった」という心の動きあるいは感情が生じたと述べられている。つまり、詩編には何らかの感情を喚起する力があるのだ。「この詩編〔詩編四〕が私にどのような作用を及ぼしたか (quid de me fecerit ille psalmus)」(九・四・八)とあるが、この作用とは感情を喚起する力を指すであろう。

ここで生じた感情は、一方(恐れる)は消極的、他方(希望する・歓喜する)は積極的な方向性を持つ相反する心の動きである。こうした対立する心の動きは『告白』においてしばしば言及されるものである。⁽⁸⁾ どのようにして二つの感情が生じたのだろうか。詩編四・三は、人に自分がむなしさと虚偽に満ちた生を生きていることの気づきと反省を迫る言葉として受け取ることができる。アウグスティヌスはこの詩編によって自分の過去がそのような生であったことを再認識させられる。この自己認識は苦痛であった。だが、他方でこの苦しい自己認識が救いを志向する心

の動きを生む。恐れは苦痛を伴う自己認識によって生じ、希望・歓喜はこの詩編が預言する確かな救いへの希求として生じたのである。

(B) 私は、「汝、怒りを発せよ。罪を犯すことなかないよう、過去の自分に対し怒りを発することをすずに学び知った (iam didiceram irasci mihi de praeteritis) 私は、これを読んだとき、神よ、何と感動したことでしょう。怒るのは当然でした。(中略) じっさい、自分に対して怒りを発したその場所において、すなわち、悔恨の痛みにさされ、古い自己を殺していくにえをささげ、あなたに希望しながら新生について思いめぐらしはじめた内なる密室において、そこにおいてあなたは、私にとって甘美となりはじめ、「心によろこびを与えてくださったのです (dederas laetitiam in corde meo)」(詩四・七)。私はこれらの言葉を外に読み、内にその真実を確認しながら叫び声をあげていました(九・四・一〇)。

(A)と同様、詩編の言葉にアウグスティヌスの過去が重ね合わせられるが、先と異なるのは、詩編の言葉によって感

情が喚起されるというのではなく、詩編の言葉の通りに自分の悔恨が怒りからよろこびへと感情の変容として起きたという再確認が行われていることである。詩編はアウグスティヌスに自らに起きた感情の出来事を語る表現を与えるのである。¹¹⁾

(C) それから私は、ひきつづく詩句を読んで、心の奥底からの叫び声をあげました。「おお、平和のうちにおお、まさにそれ自身なるものうちに (in ipsium) ! ——それから何と言ったでしょうか——「われは眠らん、まどろまん」(詩四・九)。じっさい、「死は勝利にのまれた」(一コリ一五・五四)という言葉が成就するとき、誰が私たちにさからうことができましょうか。あなたはまさに「それ自身なるもの」にましまし、変わることがありません。人はあなたのうち、すべての労苦を忘れて憩う (in te requies) のです。そこにはあなたよりほかに誰もいませんし、あなた以外の多くのものを追求する必要もなく、主よ、ただあなたが私を希望のうちにさだめたもうのです。

(九・四・一一)

これまでと明らかに違うのは、アウグスティヌスは詩編四・

九に自らの過去ではなく、救いが成就する時という未来を見出していることである。それを可能にさせているのが、詩編以外の聖句による詩編解釈である。「おお、平和のうちにおお、まさにそれ自身なるものうちに。われは眠らん、まどろまん」という一節を「死は勝利にのまれた」というパウロの言葉によって解釈している。詩編四は雨乞いの祈りと呼ばれるが、ここでは詩編四のもつ神学的・歴史的文脈は考慮されることなく、アウグスティヌスの既知の聖書⁽¹³⁾によって解釈されているのである。つまり、この詩編解釈は、字義や文脈をつきとめる解体作業ではなく、アウグスティヌスにとって決定的な出来事と呼び寄せた書を土台にして築き上げる創成の作業なのである。そして、この作業によって導き出された救いの成就の時が「それ自身なる者のうちに (in idipsum) まどろむ (requiescam)」こと⁽¹⁴⁾であり、「あなたのうちに憩う (in te requies)」ことである。この読誦経験は、「憩う」、そして「あなたのうちに」と代替可能な「それ自身のうちに」という特徴的な語を来るべき救いの成就を象徴する語としてアウグスティヌスの心に深く刻み込んだ。したがって、詩編はアウグスティヌスに神探求の基盤をなす鍵語を提供するものでもあ

る。

以上、本経験から導き出されるアウグスティヌスの詩編理解をまとめると次のようになる。詩編は (A) 心の動きあるいは感情を喚起する、(B) 感情の出来事を語るための表現を提供する、(C) 神探求における鍵語（それ自身なる者のうちに）「憩う」を提供する。

2 感情の意味、あるいは真理に触れること

さて、アウグスティヌスの詩編理解の特徴を断片的な仕方⁽¹⁵⁾で三つ挙げたが、(A) (B) (C) を内容として見れば、反省を促され、救いへの希求が生まれ、悔恨を通じて、救いの成就に至るという一連の流れがある。ここで問いたいのは、なぜこのような一連の流れとして詩編四を読むことができるのか、である。というのも、この経験と同時期に『イザヤ書』を読んだが最初の部分が分からなくて読むのを先延ばしにしたことがわざわざ述べられているからである（九・五・一三）。なぜアウグスティヌスは『イザヤ書』を読むことができなかったのに、詩編四を読むことができたのか。注目したいのは、本経験のはじめに反省と救いへの希求が

生じた、すなわち心の動きあるいは感情が喚起されたという点である。そこで感情が生起するとはいかなる事態としてアウグスティヌスに把握されているのかを、同じ第九巻で語られる、教会で讚美歌がうたわれるのを聴いて涙を流したという経験を参照し検討することにした。

あなたの讚美歌や聖歌を聴きながら、甘美にひびきわたるあなたの教会の声に感動し、何とはげしく泣いたことでしょう。それらの声が耳のうちに流れ込むとともに、真理は私の心のうちに注がれてきました。そこから熱い敬虔の感情が湧き出し、涙となってほとばしりました (quantum fleui in hymnis et canticis tuis suave sonantis ecclesiae tuae uocibus con-motus acriter! uoces illae influebant auribus meis et eliquabatur ueritas in cor meum et exaestuabat inde affectus pietatis, et currebant lacrimae) (九・六・一四)⁽¹⁵⁾。

二つの文から成っており、二番目の文は一番目の文の *con-motus* という心の動きを詳細に描写している。二番目の文の表現上の特徴は水のイメージで語られていることである。ある場所に水が注がれ、水が溢れ出すというイメージ

である。注がれる水に相当するのがあなたの讚美歌や聖歌、あなたの教会の声であり、溢れ出す水はアウグスティヌスの心から湧き出る「敬虔の感情 (*affectus pietatis*)」およびその身体的表出としての「涙」である⁽¹⁶⁾。では、溢れるとはどういうことだろうか。注がれる水が多いから溢れるのだろうか。そうではない。声の流れ込むことと涙が流されることの間には置かれる *eliquabatur ueritas in cor meum* に注目したい。「注がれてきた」と訳された *eliquabatur* は本来、「濾す」「蒸留する」という意味を持つ。つまり耳に入ってくる歌声と心に入ってくる真理は同一ではなく、歌声から真理だけが濾過されアウグスティヌスの心にしたたてくるのである。真理が確かに自分の心にしたたててきたという唯一の証が、真理を与えられた心 (*cor*) が沸騰させ湧出させた (*exaestuabat*) 敬虔の感情であり、形を伴って表出する涙なのである。では、証が立てられる理由は何であろうか。歌声の源であるあなたの言葉が応答の証を求めるからである。生起した敬虔の感情とは、神の言葉が人間に向かって応答を迫るとき、人間の側からかろうじて発せられる受領の証であり、人間の心においては真理に触れたという事態を指すのである。

詩編四の読誦経験に戻ると、(A)において生じた二つ
 対立する心の動きは真理が自分の心にしたたてた証に
 相当するであろう。この真理に触れたということが(B)、
 そして(C)へと繋がってゆくと考ええる。これまで触れずに
 来たが、先の三つの引用箇所で共通して見られる「叫び」
 は、まさに神の言葉によって応答を迫られた人間が真理を
 受領した証ではないだろうか。(A)においては感情の生起
 という仕方、(B)は自らに起きたことを神の言葉で確認
 することによって、(C)は詩編解釈によって、というよう
 に真理に触れるその仕方、そしてそこで真理と呼ばれよう
 ものはそれぞれ異なるが、アウグスティヌスは一節ごとに
 詩編が伝える真理に触れているのである。詩編四を読み進
 めさせたのはこの真理なのだ。このことは同時に、真理と
 いうものが、人を一旦知られた真理にとどめおくものでは
 なく、神の言葉のうちに秘められたより大いなる真理の開
 示へと駆り立てるものであることを示している。

この意味で、アウグスティヌスが詩編四を読んでまず心
 の動きとして真理に触れたことの意味は重い。すなわち、
 より大いなる真理への開示へと第一に人を動機づけるのは
 心の動きなのだ。たとえばそれは、一九歳のアウグステイ

ヌスがキケロの書を読んで知恵への愛へ燃え立ったという
 記述、「この書物は私の気持ちを变えてしまいました
 (mutavit affectum meum)。(中略)信じられないほど
 熱心な心で不死の知恵をもとめ、立ちあがって、あなた
 のほうに戻りはじめました (ut ad te redirem)」(三・四・
 七)、あるいは、教会で讚美歌がうたわれることには耳の
 快樂の危険性があることを指摘しつつも、「弱い精神の持
 ち主にも敬虔の感情を惹き起す (infirmior animus in
 affectum pietatis adsurgit) … 救済的効果の経験
 (experimentum salubritatis)」(一〇・三三・五〇)が
 ある、と言われていることにも表れている。心の動きあ
 るいは感情、すなわち affectus の生起が真理そのもので
 ある神の探求の端緒を開くのである。

3 「天の天」が指し示すもの

さて、考察を第一二巻の「天の天」に移そう。序で述べ
 たように、本節においては、「天の天」が天使以外に何を
 指し示すのか、その可能性が探られる。まずは、「天の天」
 の言い換えを引用する。

「天の天」は、第一に、「何らかの知性的被造物(creatura aliqua intellectualis)」(一一・九・九)である。「あなたの甘美な至福直観にふけっているために、その有する可変性は強く抑えられています。造られてよりこのかた、けっして墮落することなく、しっかりとあなたによりすがり(inhaerendo tibi)」、すべての移りさる時間的転変を超越している」。

第二に、「神の家(domus dei)」(一一・一一・一一)である。「ただあなただけを悦楽とし、ひたすら変わらぬ貞節をもってあなたを飲み、変化の可能性をもちながら、いついかなるところにおいても変化することなく、いつも御前であって(te sibi semper praesente)」、全心をかたむけてあなたに任せ(ad quem toto affectu se tenet)」、期待すべき未来も、記憶を投げ渡すべき過去もなく、変遷をこうむることも、時間のうちに延びて散ることもないあの被造物、それともあなたと等しく永遠なものではない。おお、もしこのような被造物があるとしたらば、これこそは至福なるものだ。あなたの至福にしっかりと結びつき(inhaerendo beatitudini tuae)」、そのうちにあなたが永久に住んで照らしてくださいさるような被造物があるとしたら

らば。わきに心をそらすあやまちを犯すことなく、あなたによるこびを観想するあなたの家。聖なる霊たち、すなわち、地上の天の上に住む御国の住人たちのゆるぎない平和の中で、すばらしい調和の一致を保っているきよらかな精神——これ以上に『主に属する天の天』と呼ぶにふさわしく思われるものはない」。

第三に、「崇高な被造物(sublimis creatura)」(一一・一五・一九)である。「きわめて純潔な愛によってまことに永遠なまことの神に結びついているから(cohaerentem Deo)、神とひとしく永遠ではないにしても、神からはなれ時間的変化転変のうちに流れ落ちることなく、きわめて真実な神の観想のうちにひたすら安らっている」。

第四に、「知恵(sapientia)」である。「この知恵はいつもあなたの顔をながめつづけることができ(faciem tuam semper videre)」、かたときもそこから面をそむけることがなく、したがって、いかなる変化をもこうむることがないからである。しかしこの知恵のうちにはやはり変化の可能性がひそんでいるから、もしも大きな愛をもってあなたによりすがり(tibi cohaerens)」、あたかも、たえまのない真昼でもあるかのように、あなたによって輝き熱してい

なかったならば、暗闇となり冷えきってしまうことである」(二二・一五・二二)。

四つの言い換えに共通しているのは、この被造物は可変性を帯びながらも、可変性を凌駕する存在だということである。神と永遠性を等しくするものではないが永遠性を有する存在である。この被造物のそのような特徴は「神によりすぎること」と表現されている。「神によりすぎること」は詩編「神によりすぎることとは、私にとって善いことです (mihi autem inhaerere deo bonum est)」(七二・七三)・二八)からとられたと想定される。また、この詩編は『マタイによる福音書』一八・一〇「彼らの天使たちは天でいつもわたしの天の父の御顔を仰いでいるのである (angeli eorum in caelis semper vident faciem patris mei qui in caelis est)」と同様の意味をもつとも考えられている。⁽¹⁹⁾ここで、先の引用で「知恵」が「いつもあなたの顔をながめつづけることができ」るものであることを想起すれば、この被造物は「天使」ということになるであろう。「天の天」が天使を指すという論拠の一つがここにあると思われる。

しかし、アウグスティヌスは天について「それにしても、

主よ、『天の天』はどこにあるのでしょうか」と「場所」として問うていた。場所として問うとはどういうことか。「天の天」は「神の家」として次のようにも言われている。

おお、光まばゆいうるわしい家よ (O domus luminosa et speciosa)。私は汝の美しさと、わが主の栄光の住処、汝を造り、汝を所有する方の住処を愛した。遍歴の道にある私は汝を憧れ (tibi suspiret peregrinatio mea)、汝を造りたもうた方に向かって、汝においてこの私を所有してくださるよう乞い願う。(二二・一五・二二)

Knauerによれば⁽²⁰⁾、「私の遍歴」とは、神から離向し、「欠乏の国 (regio egestatis)」(二一・一〇・一八)、「あなたから遠く離れた国 (regio longinqua)」(四・一六・二〇)をさまよっていたが、最後にはふたたび神の元へ帰還するというアウグスティヌス自身の生を指している。さらに、Knauerはアウグスティヌスが遍歴の最後に到着するこの場所をオステリアの経験で「瞬至った至福直観を示す表現に見出している。すなわち、「豊かな地 (regio ubertatis)」「あなたがイスラエルを、真理の秣によって永遠に養う場所 (ubi pascis Israel in aeternum veritate pabulo)」

(九・一〇・二四)である。以上のことを整理しよう。まず、「神の家」すなわち「天の天」とはアウグスティヌスがこの遍歴の最後に到着する場所である。つまり、「天の天」とは天使だけではなく、アウグスティヌス自身の神探求の終極の場所をも指すのである。そして、その場所はオステイアの経験において一瞬至った至福直観が持続し永遠に続く状態である。

別の観点からも「天の天」とオステイアの経験との符合が指摘される。Sorabjiは、Pépinの「天の天」は天使だけでなく義なる人の魂も意味するという見解には曖昧さがあることを指摘し、補強するかたちで、「天の天」のもつ永遠性という特徴を強調し、「天の天」はアウグスティヌスがオステイアの経験で母と話した「聖者たちが未来においてうける永遠の生命 (uita aeterna sanctorum)」（九・一〇・二三）に結びつけられると考える。さらに、オステイアの経験で永遠の知恵に「霊の初穂を結わえのこした (reliquimus ibi religatas primitias spiritus)」（九・一〇・二四）と言われた事態を聖者のうける永遠の生命に一瞬ではあるが**あ**った経験と見なし、第一二巻における「私の霊の初穂がある場所に、(中略)この分散

し形のくずれた状態から私の全存在を集め、私の姿を完全にし永遠に不動なものとしてくださるまではあなたから離れまい (ubi sunt primitiae spiritus mei... colligas... et conformes atque confirmes in aeternum)」（一一・一六・二三）という記述に繋がると見る。

以上の先行研究を踏まえて、本稿も、「天の天」とは、天使だけを指すのではなく、アウグスティヌスがオステイアに経験において至った至福の境地でもあると考える。

だが、なぜ『創世記』の天の解釈でオステイアの経験が参照されなければならないのか。さらに、オステイアの経験が詩編の言葉「天の天」と名づけられた理由は何か。これらの問題に対し、再度、先行研究とは異なる視点から第一二巻とオステイアの経験の符合点を若干挙げ考察を加えることにしたい。そして、この考察を通じて、最初の問い、すなわち、なぜ『創世記』を解釈するのに詩編が引用されるのか**が**明らかにされるであろう。

4 詩編が引用された理由

本稿がオステイアの経験で注目したのは、この経験が

感情の経験として記述されていることである。「さて話が、肉の感覚による快樂は、たとえいかに大きく、いかにまぶしい物体的な光に輝いていようと、あの永遠の生のよるこびに對しては、比較にならないばかりか、語るにも値しないように思われるという結論に達したとき、私たちはいっそう熱烈な感情をもって『それ自身なる者』に向かって高まってゆき (engentes nos ardentiore affectu in idipsum) (後略) (九・一〇・一四)。先に述べたとおり、感情の生起とは真理に触れたことを意味する。つまり、アウグスティヌスはここで永遠の生のよるこびが肉の快樂には比較にならないという真理に触れたのである。この真理が神探求の終極を表す「それ自身なる者」へとアウグスティヌスの思惟を方向づける。特記すべき点は、「より熱烈な」という比較級が意味することである。この比較級は母と對話を始めたときから生じていた感情であることを示唆するとともに、真理に触れたことによってさらにそのエネルギーが増大したことを示している。そうであれば、引用の後に、「それ自身なる者」へ向かって「段階的にすべての物的なものを通り過ぎ、さらにそこから日と月と星とが地上を照らす天をも通り過ぎ(中略)なおも昇りつづけ、ついに

は自分自身の精神に到達し、それをも超えて」(同) ゆくという、上昇の諸段階において感情はより熱烈さを増していったと想定される。すなわち、オスティアの経験では、真理に触れるということが感情のエネルギーを増大させ、感情の増大がより大いなる真理へと触れさせる回路を押し開く契機となっているのである。⁽²⁴⁾では、第一二巻でこうした感情の記述はどこに見出せるのであろうか。「天の天」の第二の言い換えの部分で「いつも御前にあって、全心をかたむけて (toto affectu) あなたに仕え」とある。すなわち、感情の有する最大限のエネルギーを発揮すること、それが完全なる真理の前に立つことなのである。⁽²⁵⁾この記述は、オスティアの経験において、感情の熱烈さの増大によって行き着いた終極の場所を表している。

また、オスティアの至福直観が一瞬であったことを示す「ほんの一瞬それに触れました (atingimus)」という記述の後に、「そして深いため息をつき (suspiravimus)」(同)とされている点にも注目したい。suspirare とは「息を吸う」そして「ため息をつく(息を吐く)」という両義的な語である。Courceille は後者に重きを置き完全に神を味わうことのできない無力感の表現と見るが、本稿では⁽²⁶⁾

両義性に重心を置く。両義性が意味するのは、真理に触れたが、それはいまだ完全に真理を捉えきれてはいないということである。ここで第一二巻において「遍歴の道にある私は汝を憧れ (tibi suspiet peregrinatio mea)」と言われていたことを想起したい。第一二巻を書いている現在のアウグスティヌスも遍歴の道にある。しかし、それはオステアの経験で触れた真理を掴んでいる者としてその道に立っている。つまり、オステアの経験で一瞬触れた真理をその始点として第一二巻の『創世記』解釈は行われているのである。「天の天」という言葉でオステアの経験が参照されなければならないのはアウグスティヌスが現在掴んでいる真理を示すためであり、「天の天」が詩編からの引用であるのは、より大いなる真理へと感情を喚起するためなのである。翻って、オステアの経験で触れた真理を「天の天」と名づけたことは、神探求の鍵語として機能させるためである。つまり、「天の天」には、詩編四の誦読経験で得た詩編理解、すなわち、感情を喚起させる、感情の経験として掴まれた真理を言い表す言葉を提供する、そして神探求の道における鍵語の三つの要素がすべて含まれているのである。

結語にかえて

最後に、以上の論考から、第一二巻の『創世記』解釈の営みとは何であるのかについて述べてみたい。本巻における天地の存在規定は序で述べた通りである。すなわち、天と地の存在論的差異が提示されている。しかし、論じてきたように、アウグスティヌスは詩編を引用してより大いなる真理の開示を目指して自らの感情を喚起させようとしている。つまり、本巻の『創世記』解釈は天地の存在論的差異の埋めがたさの提示ではなく、むしろ、「この分散し (dispersio) 形のくずれた (deformis)」（二二・一六・二二）アウグスティヌス自身がその存在論的差異を乗り越え、形相づけられたものへと変容するための実践的営みなのである。⁽²⁷⁾ その変容について、教会で讚美歌がうたわれたときに「真理が心 (cor) にしたたってきた」と言われていたことを想起しよう。変容とは心の変容、真理が注がれることによる心の変容である。心が真理に完全に満たされたとき、心は「そのうちにあなたが永久に住んで照らしてくださる」（二二・一一・一二）神の家となるのである。⁽²⁸⁾ そし

て、そのときには感情は真理そのものである神に満たされ
 最大限のエネルギー (totus affectus) を發揮しているこ
 とである。オステイアの経験で一瞬至った至福の境地が
 次のように言われているように。「それこそはまさに『汝
 の主のよるこびのうちにはいれ』と言われるときではない
 か (nonne hoc est: intra in gaudium domini tui?)」
 (九・一〇・二五)。

注

- (1) 『マニ教徒を論駁する創世記註解』(三八八年)、『未完の創
 世記逐語註解』(三九三年)、『告白』第一一—一三卷(三九
 七—四〇〇年頃)、『創世記逐語註解』(四〇—一四一六年頃)、『
 神の国』第一—二三卷(四二—四二六年頃)。加藤信朗
 「アウグスティヌスの聖書解釈をめぐって——『神の国』か
 らの視点——」、『バトリスティカ』第七号、新世社、二〇〇
 三年、一七頁参照。
- (2) テキストは、*Oeuvres de Saint Augustin 14*, Paris, *Études*
augustinienes, 1992。翻訳は、山田晶訳『アウグステイ
 ヌス』(世界の名著)、中央公論社、一九七四年を使用、ただ
 し、言葉遣いを変更させていただいた部分もある。本文の丸

括弧内の数字は巻、章、節を示す。

- (3) 最初に七〇人訳の章番号、次の括弧に新共同訳。
 (4) 「あるいは天と地ということ、霊的、物体的被造物両者
 の無形相的質料が語られているのであるうか」『創世記逐語
 註解』一・一・二(片柳栄一訳「アウグスティヌス著作集」
 第一六巻、教文館、一九九四年)。なお、『告白』と『創世記
 逐語註解』の天の解釈をめぐる相違に関しては、片柳栄一
 「創造における *Conversio*——アウグスティヌスの『創世記
 逐語註解』における霊的被造物の生成——」『中世思想研究』
 第二五号、一九八三年、五九—七九頁参照。
- (5) 『告白』全体における詩編からの引用は二二七回、詩編を
 除くほかの旧約聖書からの引用は二八七回。Cf. P. Burns,
 "Augustine's Distinctive Use of the Psalms in the
Confessions: The Role of Music and Recitation," *Augusti-*
trian Studies 24, 1993, p.133.
- (6) 「天の天」を天使と同一視する見解は、たとえば、E. Gil-
 son, *Introduction a l'étude de S. Augustin*, Paris, J. Vrin,
 1969, p.257。河野一典「アウグスティヌスにおける霊的質
 料の問題」『中世思想研究』第三三号、一九九一年、一〇〇
 頁。なお、この論点は発表当日(第一二〇回教父研究会、二
 〇〇七年六月)加藤信朗氏にいただいた質問によって着想
 を得た。
- (7) 感情の喚起は『告白』の読書効果と重なってくる。「自分
 の気持ちとこれを読む人々の気持ちとをあなたの方に高め、

みなが口をそろえて、『偉大なるかな、主は。まことにほむべきかな』と言ったためなのです (sed affectum meum excito in te et eorum, qui haec legunt, ut dicamus omnes: magnus dominus et laudabilis valde) (一一・一・一) 参照。

(8) 「私は愛と恐れにわななきました (contremui amore et horrore) (七・一〇・一六)、『いたく驚くとともに燃えあがります (inhorresco et inardesco) (一一・九・一一)、『尊敬よりおこる恐怖、愛よりおこる戦慄 (horror honoris et tremor amoris) (一一・一四・一七)』。これらの例は以下を参照した。J. Pépin, "Le livre XII des Confessions," in: 《Le Confession》 di Agostino d'Ippona, libri X-XIII, Palermo, Edizioni Augustinus, 1987, p.84. この二つの対立する感情については荒井洋一氏よりご質問をいただいた。その際には恐れに重きを置くと単に述べたが、両方ともアウグスティヌスの神探求にとっては必要とされる心の動きであると現在は考えている。

(9) アウグスティヌスは、弁論術教師であり、またマニ教徒、女性と同棲していた自らの過去の生をむなしもの (vanitas) / 虚偽 (mendacium) であつたと回顧している (四・二・一一)。「そこで預言者 (propheta) は、『つままで重く心でいるのか。何のためにむなししいことを好み、虚偽をもとめるのか。主は聖なる者を偉大ならしめたことを知れ』と叫びます」 (九・四・九)。

(11) Cf. P. Burns, *Op. cit.*, pp.134f. なお、「感情を喚起させる」 「感情の表現を与える」というアウグスティヌスの詩編理解の二つの要素は、韻文としての詩編に対する基本的な了解事項でもあろう。「韻文というものは、歌や韻律的動作に合うようにできている。そして、知識や情報を与えるよりは、むしろ感情をあらわす要素、また聞き手や参加者に同じような感情をおこさせるための要素を含んでいる」。フランシスコ会聖書研究所訳注『詩編』中央出版社、一九六八年、一〇頁参照。

(12) Cf. *The Anchor Bible: Psalms I, 1-50*, intr., tr., and notes by Mitchell Dahood, New York, Doubleday & Company, 1965, p.23.

(13) 「それから私は、あなたの霊によって記された尊い書物とって、これをむさぼるように読みはじめました。とりわけ使徒パウロの書を」 (七・二一・二七)。

(14) 「告白」冒頭に置かれた「あなたは私たちをあなたにむけてお造りになりました。ですから私たちの心はあなたの方々に憩う (requiescant in te) まで、安らぎを得ることができないのです」 (一・一・一) というアウグスティヌスの神探求とその終極目的を表す一文を想起させる。

(15) この引用では、詩編についての明示的な言及はないが、詩編がうたわれていたことについては、九・七・一五および一〇・三三・五〇に記されている。

(16) 感情が身体的表出を伴うという点については、遡って、引

- 用(A)の二行目に関しても指摘できることである。原文を直訳すれば、「恐れること」によって「恐れた」となる。inhorrescere と timere という同様の意味を表す言葉が重ね合わせられている。inhorrescere の第一義は「寒さで凍える」である。そこから「恐れる」という意味が派生したのである。したがって、inhorrescere は心の動きによって (timendo) 惹き起こされた身体の変容をも含意した表現と解されうるのである。
- (17) 「叫び」についてはさまざまな用例を比較検討した先行研究がある。荒井洋一「淵が淵を呼ぶ——『告白』一三・一三・一四」『パトリステイカ』第七号、二〇〇三年、五五—八二頁。紙幅の関係上、詳細に検討することはできないが、荒井氏の、剣闘士が致命傷を受けてあげた叫び声とアウグスティヌスの過去の回想による苦しみから出た悲鳴とが対応しているとの指摘は示唆に富む。本稿では、(A)の叫びに苦しみから出る叫びと救いの希求から出る叫びという二つの意味を読み込むが、さらに荒井氏の指摘をうけて考えるならば、この叫びはアウグスティヌスを傷つけた(苦しい自己認識をつきつけたという意味で)神に対する傷の癒しの懇願と解釈できよう。
- (18) G. N. Knauer, *Psalmenzitate in Augustinus Konfessionen*, Göttingen, 1965, S.104, n.2
- (19) *Ibid.*
- (20) G. N. Knauer, "Peregrinatio animae: Zur Frage der Einheit der augustinischen Konfessionen", *Hermès* 85, 1957-58, S.216-248; *Oeuvres de Saint Augustin* 13, Paris, Études augustiniennes, Introduction par A. Solignac, 1992, pp.24f, n.1.
- (21) オステイアの経験は母モニカとの共同の宗教的経験を指す。九・一〇・二三—二五参照。
- (22) Cf. J. Pépin, "Recherches sur le sens et les origines de l'expression *caelum caeli* dans le livre XII des *Confessions* de S. Augustin", *Bulletin du cange* 23, 1953, pp.272f.
- (23) R. Sorabji, "Time, Mysticism, and Creation" in: *Augustine's Confessions: Critical Essays*, ed. by W. E. Mann, Oxford, Rowman & Littlefield Publishers, 2006, pp.219f.
- (24) オステイアの経験における「より熱烈な感情」の意味については別の機会に主題化して発表した。「宗教的経験と感情——アウグスティヌス『告白』第九巻を中心に——」(第六六回日本宗教学会学術大会、二〇〇七年九月、於立正大学)。本稿は一部その発表と内容が重複している。
- (25) オステイアの経験は感情の経験として記述されると同時に、至福直観が「この一瞬悟りえたもの (hoc momentum intelligentiae)」すなわち知性的認識として記述されている(九・一〇・二五)ことも、「天の天」の言い換えの一つ「何らかの知性的被造物」に符合する。
- (26) P. Courcelle, *Recherches sur les Confessions de saint*

Augustin, Paris, De Boccard, 1950, p.224, n.2.

- (27) 本稿では、本巻の『創世記』解釈がアウグスティヌスの天地解釈だけではなく、アウグスティヌスとは異なる天地解釈をする *contradictores* との対話という特徴的な形式がとられている点については触れることができなかった。詳細は別稿で論ずることにしたいが、この対話相手が *laudatores* とも呼ばれ (一一・一四・一七)、アウグスティヌスと同様に『創世記』の讚美者であることに注意すべきである。 *contradictores* の天地解釈もまたそれぞれが掴んだ真理なのである。したがって、真理を掴んだ者同士の対話が行われているのである。この対話形式は、より大いなる真理がキリスト教共同体において開示されることを示唆していると思われる。
- (28) 『主の山上のことば』(三九三—三九六年)では、主の祈りの冒頭句について『天にまします』とは、すなわち、『聖者や義人の中にまします』という意味(二・五・一七)と言われている。
- (29) オステイアの経験における至福直観は、神の言葉を被造物を通じてではなく、神自身を通じて聞くことと表現されている。九・一〇・二五参照。